

## 戦前日本の教育成果：府県別データ分析

横山和輝

### 要旨

戦前日本において文部省は壮丁教育調査を実施していた。これは徴兵検査に付随して行なわれた満20歳男性を対象とする学力試験である。本稿は、壮丁教育調査の得点として学力を捉え、これを教育成果の指標とみなす。その上で、府県別データを用いて学力の生産関数を推定することで、学力の決定要因を分析する。結果として、(1)壮丁の学力が、彼らの小学生時代の府県の豊かさの指標あるいは授業への出席率で説明できること、(2)国語については教員1人当たり児童数の効果が観察できること、そして(3)彼らの小学生時代の出席率の高さや公民科の成績の良さが、昭和初期の小学生の出席率にプラスに効いていること、の3点である。豊かさの違いが学力差をもたらした側面は否めない。その一方で、公民科に関する大人世代のリテラシーの高さが小学校教育への需要を牽引していたという構造を読み取ることができる。

キーワード：教育成果；学力の生産関数；壮丁教育調査；出席率；公民科。

横山和輝

名古屋市立大学大学院経済学研究科

〒467-8501

愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑1

e-mail: kazky@econ.nagoya-cu.ac.jp